

ブタ忌避の一側面 (湿潤, 乾燥文化論から)

コンサルタント Info Box 津田謙二

はじめに

このたび筆者は、本誌 No. 13 (1998) にもご紹介した元外交官、とんじ、こと片倉邦雄氏と共著で、ブタと人との関わりをまとめた“文化トン類学”とも言うべき書「トン考」を上梓した。ここには、本誌に連載の記事のいくつかが含まれているが、共著者とんじ氏の筆による“ブタのタブー”は研究成果としても本書の中心となるものであろう。

このブタの忌避、禁避については、古代エジプトでも、ナイル上流の上エジプト・乾燥地の民による下エジプトのナイル・デルタ地域征服の時(紀元前2000年頃)に出現した。ブタ文化そのものと思われる中国の歴史の中でも、遼、金、元といった北方遊牧民が支配者となった時期には、ブタは敢えて無視され、モンゴル系統の元の時代に記された料理書の中味も肉と言えればほとんど羊肉で占められ、ブタの記述はごく少ない。支配する民族の価値観によって、現実に民衆は多く食べているにもかかわらず、その扱いに冷ややかさが見られるのである。

こうした中で見られるある種の宗教、民族におけるブタへの態度・姿勢の背景というか、一考察としての、乾燥文化(砂漠の思考、移動文化、無機物環境)と湿潤文化(森林の思考、定住文化、有機物環境)の比較、そして湿潤文化の中でも特異な形態とも言える日本文化を対比しながら、筆者なりの分析、解明を行ってみたい。

人類, そして家畜の出現

イノシシもそうであるが、人類もそのほとんどは最初は湿潤地帯すなわち水のある環境、あわせて植物群の豊富なところで出現し、生き延びてきたと言えよう。水と植物は必需品だったと見る。

そのうち人類は火を使うことを覚えた。これは暖をとる、他の野獣(火をこわがる)を寄せ付けぬ効果もあったが、最大のメリットは食範囲の増大、すなわち火を通すことによる非可食物の可食化、さらに殺菌や寄生虫を殺す作用、火を通すことによる保存(再度火を通して安全な食の獲得)、次いで燻煙による保存食品化がその生息範囲の拡大に役立ったものと見られる。

さらに人類が文化-思考し、知恵を発揮する一を得るに至った次の大きな過程は、農業(計画的食糧生産)と野生動物の家畜化であったと見る。これについて、歴史学者W・H・マックニールはその著書「世界史」の冒頭に“人間の歴史における最初にして最も注目すべき出来事は、食糧生産の発達と野生動物の家畜化であった。これによって人口は増大し、文明の発生の基礎がぎざかれた”といみじくも述べている。

いま人類は、極北の地から砂漠地帯にまで住むようになった。だがその背景には常に火が存在し、乾燥の地では保存の効く穀物が食物であり、移動生活を支える家畜が存在した。しょせん水と火、乾燥地では穀物が欠かせぬ生活手段なのである。その一方で、イノシシとその家畜化したブタもま

た水と森林が欠かせない動物であることはすでに本誌 No. 15 “ブタと水, そして猪八戒”にも述べたとおりである。

この人とブタとの共通点がその一方でブタの忌避に関わっていくと見る。つまり愛憎とは物事の表と裏の関係に過ぎないのだ。愛の反対は憎悪ではなく無関心, つまり思い出したくもない, むしろ忘れ去りたい存在であると考えれば, この二面価値 (アンビバレンス) の謎の一部がお解りいただけるかもしれない。

乾燥文化, 湿潤文化, そして日本の特異性

さて, ここでブタ忌避の一側面としての乾燥, 湿潤文化の比較を展開してみたい (表1)。

表1に示された中で, 世界の文化の中でも同じ湿潤文化に属する日本人, 日本列島という国土はやや特異な条件下にあると見る。島国で外国の侵略, 支配を受けにくかったこと, 目の前で異民族の暴挙を, 国境線の変更を見なかったといった面は別にしても, その特異性は一応念頭に入れておくほうがよい。すなわち, 降水量が多く, 四季がこまやかに変化していく, 森林が降った水を保持し, しかも河川は島国のため流域が短く, 飲用に適する水はいつでもどこでもと言えるくらい容易に得られた。水はタダ, しかもきれいな水であって当然, の国土。

ここでは水でものを洗うことは清めることを意味する。これが神道に色濃く反映している。すなわち口をすすぎ, 水を浴びて身体を清める。修行や精進の時は^{サイカイモクヨク}齋戒沐浴する。これで汚れは除ける。何かあっても禊ぎをすれば水に流せた。甚だ勝手な言い方だが, 水はすべてを浄化するものとの観念がそこに芽生える。これが時には政治家が不祥

事を犯してもしばらくすれば禊ぎは済んだと称して再登場する理由にも使われる。ともあれ流域が短く, 大陸や乾燥地と違って水の中にはミネラル, 特に石灰分が少なく, 細菌もわずかなため, そのまま飲用でき, 生魚でも何でも水で洗えばそのまま食べられた。水による浄め, の概念が生まれたのである。

この点, 砂漠の民族では今でも手を洗うのは食後の習慣があり, 教科書にも述べられている。その昔, 肉などを手づかみで食べた名残であろうが, 今でも正式の場に出されるフィンガーボールにその名残が見られる。そこには平素乾いた場で, 無機物に囲まれた人達は, べたべたした食物の残り, つまり有機物を汚れと見, それを水で洗う, の概念があるのではないか。乾燥した世界では, 土, 砂は払い落とせばそれで済む。逆に匂い, 腐敗しやすい有機物こそが汚れのもとだから, 食前でなく食後にも手を洗うのではないか。

今一つの日本の特徴は, 四季の存在, そしてその移り変わりの細やかさであろう。降雨量とその水を保持する森林, 草生えの中で多くの生物が^{ツギツギ}と出現し, 姿を変え, 移りゆく季節感を味わわせてくれる。緑色の表現ひとつでも, もえぎ色, 若葉色, 草色, 新緑, 深緑, と多くの表現がある (その代わり, 喉がかわいた, の表現はただひとつ, これが砂漠の民族では, ちょっとビールでも飲みたいから, 死にそうだ!! まで5段階ぐらゐの表現があると聞いている)。

こうした自然の細やかな移り変わり, 驚嘆すべき自然のしくみは, 山・里・谷・海辺それぞれの場で異なった姿で出現する。こうした世界はたった一人の神の仕業とはとても思えなかったに違いない。同じ降水にしても^{キリサメ}霧雨から^{サミダレ}五月雨, ^{フスカタメ}小糠雨

表1 ブタ忌避の一考察 (文化比較)

分類 (別の見方 表現)	乾燥文化 (砂漠の思考) 移動文化(交易) 無機物環境	湿潤文化 (森林の思考) 定住文化 有機物環境	(その中の日本)
自然	苛酷, 生命少ない 単純 移動しやすい	動植物に囲まれる 種々相, 変化 森林は移動を妨げる	四季の変化こまやか 清浄な水あって当然
太陽 (夜)	すべてを焼きつくす 水分を奪い去る 月夜は気持ちよい 移動にも適	万物の生命の源 闇…悪魔の出る時 こわい所	同左
宗教	一神教 にて足りる自然	多神教 多くの神が自然を分担 または精霊がいる	八百万の神 木にも山にも岩にも神 精霊だらけ
家畜	少食, 乾燥に強い 山羊, 羊, <u>ラクダ</u> が主 ↓ 横動力	ブタ, 牛…大食 犬, 猫…ペット, 有用 ニワトリ…人間の庇護 (特にブタは水獣, 水が必要)	一時期イノシシ
住居	移動を考え簡単 定住してもすぐ移転 ↓ 有機物ふえる, 不潔だ	定住。 大きく, 防御機能 集団生活 (集落)	集合集落 相互監視 よそ者排除
清浄観	有機物…くさる, 汚れる 食事後手を洗う	大河はすべてを清める 流転のシンボル 横で洗たく, 排泄, 死体流す	口を水ですすぐ 斎戒沐浴 水に流す, 禳ぎ
持ち物	少ない方が動きやすい 多くて良いのは家畜	物持ち, 豊か, しあわせ 大きい, 高価…が価値 多いのは権力, 富の表れ	
売買	要るものしか買わぬ 売の方は高く売る 一期一会の勝負	保存可能, 安ければまとめ買い 取引先, 長いつきあい, 妥協 収穫多ければタタキ売りも	
勤労観	家畜の数 > 神のみぞ知る 草野生え方 > 神が決める 貧富の差, 個人の力でど うにもならぬ	草むしる, 手をかける …収穫増, 家畜増 勤勉は徳 他と比べたくなる	

から夕立, 土砂降りが, また雪でも風花から粉雪, 牡丹雪, 吹雪まで存在する国土である。そして場所ごとに異なった生物が棲み分けている。

となるとそれぞれの土地に, 丘に, 山に, 谷にそれぞれの神が, 靈魂が存在し, 宿り, 時には動植物の姿で人間を見つめ, 支配していると感じたに違いない。八百万神ヤマトノカミとはよく言ったもので, 小さな山の四季の変化にも大なる生命というか, 何らかの意志が働くと思うとき, 人々はそこに祠を立て拜んでおこう一時には面倒な関わりに, たたりのないようの願いも込めて一という気になる。これが多神教の発想につながっていく, と見る。七五三でお宮参り, 結婚式は教会, お葬式は仏式で平気, 誰も気にしない。こういう日本人の発想, このあたりがユダヤ教やイスラーム教といった一神教の信仰からはまず考えられぬ, 相容れない所ではなかるうか。

日本ほどではないにしても暖かく植物の多い所では多神教発想が生まれる。水に対しての感覚も, いわゆる清浄な水でなくとも大河はすべての恵みの源泉であり, すべての汚れを流し去るとする発想を生む。インドの聖なる河に対する考えは, 今も口をすすぎ沐浴するそばで死者を焼き, 別の所では排泄している風景が見られる。ここで見られる多神教発想は仏教にも見られる。釈尊以前にも諸仏が存在し, 他の宗教に対しても極めて寛容である。

ギリシャやローマ, それに森林がまだ存在した古代エジプトでも, 天使や妖精, 精霊から聖人に至る一種の多神教発想があったと考えられる。そして水はやはり浄めの役を果たしていた。教会では聖水が用いられた。

こうして人類の多くは水の近くで生き, 水で洗

い清める生活をし, 多神教的素地があったと見る。そこに農業がおこり, 人は定住生活に入る。住居の近くはその廃棄物で汚れるが, それをイノシシやブタが片づけてくれる。定住で農業が成立し, そこに富が発生する。こうした湿潤, 多神教文化(広葉樹林帯文化とも言える)の発生場所は, 化学者の眼で見れば有機物に囲まれた文化とも言える。

一方で放牧民族, 移動生活を常とする人々も出現する。この移住, 移動生活という行為はもしかすると, 農業を知る以前の衣食, 時にはよりよい住を求めての, 一種の本能的な行為であったように思われる。それも支配階級(日本では武家, 欧米では王侯や貴族それに教会が土地を, そしてそこに住む人を支配した)が, 出現する前の土地所有の概念が生じる前の知恵であったように思える。それがひとつの民族形態になったのがジブシーであり, 日本では山窩といわれる人達であろう。

その一方で, 民族抗争, 他民族よりの圧迫やむなく不毛の地を放浪する人達も出現した。その大規模なものはモーゼのエジプト脱出である。この荒野を旅する生活は, 土地の乾燥化, 砂漠化の中でそれなりの形態, 遊牧民, 通商の民, 騎馬民族(ラクダ使用も含む)が出現していく, と見る。

これらの生活形態は乾燥地に強く, 比較的少食の家畜, つまりヤギ, ヒツジ, ウマ, ラクダといった家畜の獲得後に初めて成立し得るものであろう。そしてこのような生活に最も適しない家畜は, 移動性がなく, 水や, 多量の飯を必要とするブタであった。

遊牧民はわずかな草を求めて, 通商の民は荷物運搬能力, 時には機動力ともなるウマ, ラクダを連れての生活を行う。とはいえ飼い主の人間の

食物は持ち歩きに便利な穀物（製粉したのものも含めて）すなわち農産物であった。彼らは家畜の肉や毛、それに遠隔地の商品と交換で穀物を手に入れねばならなかった。

以来、ウマ、ラクダといった機動力を得た人達はその機動力をフルに生かして、定住民族つまり営々として土を耕し、富を蓄えた農耕民族に対して穀物、財宝、時には女性の略奪行為を行うことになる。ここに騎馬民族の農耕民族に対する優越感（時には侮蔑感）が芽生える。映画「七人の侍」（荒野の七人も同じ）でも見られるように、豊かな生産手段を持たぬ略奪側の一種の劣等感が、襲う側の論理としてのゆがんだ優越感を生み出した、とも言えるのではないだろうか。

価値観の差異

同じ乾燥地文化でも北方の民族はまだ季節による寒さに耐えねばならなかったが、緯度の低い地域の自然はさらに苛酷であった。死海に象徴される太陽による地表からの水分蒸発は人々の生存に対しても容赦はしなかった。日本はもちろん、湿潤地域に見られる太陽の恵みはここでは地表の何もかもを乾かし、生存条件を奪う苛酷さのシンボルでしかなかった。太陽は優しくないのだ。砂漠の中の生き物、それは乾燥からいかに身を守るか、生き抜くかの中で淘汰され、生き残った生命だった。

そこには気候の、自然の細やかなうつろいは無い。単純で、無機質に囲まれた世界でしかない。そこでは夜こそが、月の光の下のほうがはるかに好ましい環境だった。イスラーム教に見られる三日月のシンボルはまさしくこのことを物語っている。同じ夜でも森林地帯の場合は、夜行動物が行

き交っては餌を求め魑魅魍魎^{チミモウリョウ}、百鬼夜行の世界となる。これも多神？教的発想につながると言える。焼け付くような陽光、時には砂嵐、ごくごくたまにまとめて降り注ぎひとときの川の流れを作っては去る雨、こうした単純な自然現象は一人の神の意志にて事足りる。一神教が生まれるゆえんであると見る。

こうした環境でのイスラーム教の発想は、唯一の神は人間の行為の何もかもをご覧になっているぞ、ご存じだぞ、だから悪いことはすべてお見通しだぞ、ということになる。そうかもしれぬ。砂漠の中で行き会った人、殺して持ち物を奪って遺体を土に埋めても周囲に生き物（植物も含めて）の眼のない所とあってまずばれる恐れはない。となるとこれは神様の眼は逃れぬぞとして防ぐほかはないではないか。今でもベドウィンの人達と起居を共にした片倉もと子氏のフィールドワークの経験では、女性の一人旅は実に安全だったと述べておられる。神様の眼がくまなく行き渡り、神様の眼に守られている、そんな感じがしてくる。

さて、こうした乾燥地の移動を前提とした生活は当然のこととして土地に対する執着は生まれえない。同じ土地といってもその生産力はきわめて低いのだ。

こうした生活の中で、移動を常とする人達は逆に定住生活のデメリットを見出したに違いない。そのひとつは定住によって人間の排出したゴミ、廃棄物（腐りやすい有機物が多い）がたまっていくことである。水で洗い、清めることのできにくい彼らにとって、乾いたきれいな砂の上にこそが何より清潔で安心できる場所であって、廃棄された有機物の蓄積は生活環境の悪化を意味する。同じ所に永く住むと周囲も、身も心も汚れると感じ

るのである。ここに湿潤文化との清潔感の大きな差異が生まれる。彼らにとって、住居周辺の有機物、時には腐りかかったものまで食べあさり、水や泥の中で体温を下げるためにのたうちまわるブタの存在そして食用は、不潔感の、そして定住民族をいやしいものと見下げる大きな理由になる可能性がある。

こうした遊牧、移動の生活は、生き抜くための価値観、勤労観も、農耕・定住民族とは異なってくる。農耕民族では深く耕し、水をやり、雑草を除く等手間をかければかけるほど収穫がふえ、富を得る。勤勉は富の源泉なのだ。ところが遊牧の民はそうは行かぬ。ヒツジをなでてもたついても仔をたくさん生むわけではない。家畜の増加、草の多い少ないは人智や勤勉と離れた所にある。となると祈る他ないではないか。すべては神の御心のまま、と考えざるを得ぬ。働いても、今以上に働きようがないとも言えるが、報いられないのだ。その一方でひとり考え、思索にふける時間は十分にある。詩を作り、それを口に出すことが価値ある行為とされる。

移動の生活の中で出会う人には、同じ苛酷な自然に生きる人間同士として、見知らぬ人にでも、日本人には考えられぬほどの親切を示す。乏しい中の食物を分け与えて歓待する。これを受けた日本人が何とか感謝の気持ちを伝えようと繰り返しお礼を言うと彼らはけげんな顔をする。客人を心からもてなすことはよいことなんだ、神に対してよいことをさせてもらっているのだ、ごく当たり前の行為に何故しつこく礼を繰り返すのかが理解できない。

貧富の差はこのような生活で、個人の努力では如何とも為しがたいとなったとき、彼らは富める

人が貧しい人に物を与えるのはよいことだ、との発想に到達する。これもイスラームの教え、一神教の神の御心にかなうよい行いなのだ。そこで、富者から物を与えられた側はお礼を言う必要がないと考える。何故？ 神に対してよいことをさせてあげている、からだ。

だから本多勝一氏が経験したように、遊牧民に歓待されたとき、お礼にと差し出した品物はそれこそ奪い合うように持ち去って誰ひとりお礼の言葉を言わなかった、という現象が起きる。それが高価な物でも、贈り主つまり与える側に神様に對しよいことをさせてあげたのだから。

富は勤勉から、貧乏は努力不足、と考える農耕民族にはどうてい考えつかない発想がそこにある。インドネシアで駐車場に車を入れて、現地の人倍の料金を請求され文句を言ったところ、日本人はお金持ちだ、だから神様によいことをさせてあげたのに、と言われた人もいる。

価格感覚の差も

移動生活では持ち物は少ない方が動きやすい。そこで物を買う時は本当に必要な物を、となる。安いからまとめ買い、はあくまで保存しても困らぬ定住民族の発想なのだ。乾燥、移動文化ではコストよりも何よりも、どうしても要るから買いに来たのだら、ならそれだけ支払って当然として平気で高価を吹っかける。ダメでモトモトの発想がある。断れば平気で値下げ。価格とは双方の交渉、合意の上で決まるものなのである。定住民族なら、まあいいや今回負けとくから次は頼むよ、となるが、彼らの商行為はまさしく一期一会、次に会える機会などまずない。今いただけるものは今のうちに、となる。

だから今でも西アジア、中近東の超一流ホテルの売店で買い物をするときも値切るのは当たり前である。ある日本人の経験ではかなりの時間ねばって100の物を70にまで値切り、ついにOKと言わせた。問題はその後だった。3個買うから210だなと言ったら、先方はきっぱり拒否。3個も必要なら300払うべきだ、私は1個だから値引きに応じたのだ、と言われたそう。この発想、彼らからすれば何とも理にかなっている。それをおかしいと思う日本人の感覚、とにかく売れば、利益が出れば、時には出来すぎた農作物を少しでも現金化出来れば、といった発想から来る価格感覚との違いを思い知らされるのである。

こうした背景を踏まえた上でないと、乾燥民族、イスラーム圏の国や企業との交渉は一筋縄では行かない。石油に関する交渉ひとつでも日本人の感覚のほうが国際的に見てヤワなのではないか、とさえ思えてくるのである。

さいごに

自然環境によって、そこに住む人の知恵が、発想が、文化が、宗教が変わることが以上の例によってもお察しいただけると思う。同じ仏教でも、インドやセイロンのそれと、中国や日本がまた異なった型や説明方法で同じ真理を求めようとするし、キリスト教がロシア正教などの他に、アメリカでのやはり極端な乾燥地、苛酷な自然のソルト

レーク（塩湖が地名になっている）に入って変貌したモルモン教一酒はもちろんコーヒー、茶も飲まない、複数の妻帯を認める一にも見られるが、ここではこれ以上詳しい考察は省略しよう。

ただ、ユダヤ教やイスラーム教、それに乾燥地の生活、文化になじんだ人達が極度にブタを見下げ、忌避する態度、生活哲学の根源部分の一考察として、敢えて多くの脱線をも交えて述べさせていただいた。

折しも今年の1月にインドネシアで、味の素(株)の現地生産責任者が、消費者保護法違反で逮捕されたとの報道に接した。調味料製造工程にブタの消化酵素を触媒として使用していたのだ。これはイスラーム教徒と聖職者団体「ウラマー」の求めに応じて表示される「ハラール」(イスラーム教義に照らして“許される”を意味するアラビア語)検印に違反した、との嫌疑によるものである。その後ワヒド大統領自らの調査で、その事実はないと言明したものの、一時は味の素製品の多くがインドネシア市場から回収される等、東南アジアのイスラーム圏に深刻な波紋を投げかけた。

平素、友好関係にあると信じている人々も、こと異文化、その根源のイスラーム問題となると襟をただしてお付き合いしなくてはならぬことを改めて痛感させられたことを述べて、今回の稿の終わりとしたい。